

DOMINO

2005(平成17)年11月6日鑑賞(OS 劇場)

★★★



監督・プロデューサー＝トニー・スコット／出演＝キアラ・ナイトレイ／ミッキー・ローク
／エドガー・ラミレス／ジャクリン・ピセット／ルーシー・リュウ／デルロイ・リンドー
／モニック (UIP 配給／2005年アメリカ・フランス映画／127分)

……元スーパーモデルの美女が突然バウンティ・ハンター（賞金稼ぎ）に転身！ これは実在の美女ドミノ・ハーヴェイの驚くべき物語だ！ 生と死の確率はコインの表裏と同じ50%。そして、法の執行官となるのかそれとも第一級殺人犯として法の裁きを受けるのかも紙一重。FBIによる「取調べ」の中で回顧される物語が複雑すぎるのが難点だが、雰囲気だけはタップリと……。映画完成直前の2005年6月27日、自宅浴室でドミノの遺体が発見された。享年35歳！ あまりにも短い人生はある意味で儚いが、その反面、その死によって「ドミノ伝説」を生むことに……。奇しくもこの映画を観た11月6日、私の大好きな本田美奈子が急性骨髄性白血病のため38歳で死去したとのニュースが……。合わせて合掌……。

バウンティ・ハンターとは？

『DOMINO』とは実在した美人バウンティ・ハンターのドミノ・ハーヴェイのこと。そしてこの映画はこのドミノを主人公として取りあげたものだ。

この映画のパンフレットには、米国FRP連邦捜査官・作家という肩書で、バウンティ・ハンターを自称する荒木秀一氏の「Real Story 地獄の扉を開けた人たち——これがリアルなバウンティ・ハンターの世界だ」と題された解説があり、興味深い。まず第1にバウンティ・ハンターとは賞金稼ぎのこと。

驚くべきことに、「自由の国アメリカ」「犯罪大国アメリカ」には、長時間の講習と法律の試験をクリアした有資格者としてのバウンティ・ハンターが存在し

ているとのこと。バウンティ・ハンターの歴史は約130年前の西部開拓時代にさかのぼるもので、彼（彼女）らは逃亡した犯罪者を捜査して、逮捕連行するという権限を与えられるらしい。しかもこれは正規の警察組織ではないため、そのやり方はすべて自由。

もっともこれが許されるのはあくまで法の範囲内だから、先に銃を発射して射殺してしまったりすればエライこと。あくまで逃亡者を逮捕して連行していくことが任務だから、その苦勞が並大抵ではないことは明らかだ。では、なぜそんな職業がアメリカで成立するの……？ それは1つは報酬の魅力、そしてもう1つは人間が求めてやまない自由のため……？

ドミノがなぜこんなバウンティ・ハンターの職業を選択したのかについては、項をあらためて……。

保釈保証人制度とは？

第2に興味深いのは、アメリカの「保釈保証人」制度。戦後日本の刑事訴訟手続における「保釈保証金」制度は、もともとアメリカの制度を取り入れたものだから、基本的に日米の構造は同じだが、アメリカ特有の制度がこの保釈保証人制度。これは、保釈金保証会社（バイルボンズ）が被告人に代わって保釈保証金を裁判所に積み、これが戻った時点でその20%を報酬として受領するという制度とのこと。それだけならいい商売だが、そのリスクは被告人が出所した途端に逃亡してしまうこと。

そうなると保釈金保証会社は180日以内に逃亡者を指名手配して逮捕しなければならず、連れ戻せない時は保証金は没収されることに。そうなると大変だから、そこで追跡・逮捕のプロであるバウンティ・ハンターの活躍の場が提供されることになるわけだ。

私が興味を持つのはバウンティ・ハンターの報酬だが、「日本人でただ1人のバウンティ・ハンターで、これまで捕えた逃亡犯は50人以上」と書かれている荒木秀一氏も、そこまではこの解説では触れていない。推察するに多分これは、業務上のマル秘事項ということだろう……？

弁護士による保証制度とは？

それはともかく、日本で保釈保証人制度に近いものは、弁護士による保証制度だが、これはほとんど活用されていないのが一般。私たちが司法修習生時代に学んだのは、この制度は被告人が自分の身内など特殊なケース以外には活用すべきではないということ。

一見の客(?)である被告人の保釈保証金を弁護士がホイホイと保証した挙げ句、被告人に逃亡されて、保釈保証金を弁護士が納めなければならないことになるのは、弁護士の未熟さを示すもの、というわけだ。

したがって弁護士による保証制度が使われるケースは少ないが、これによってままと弁護士が大ヤケドをさせられたのが有名な許永中事件。これは、保釈保証金6億円のうち3億円を数名の弁護士が保証していたところ、許永中が韓国へ逃亡してしまったため大騒動になったものだが、この映画を観ながら、ついこんな事件を思い出してしまったのは、やはり私がいつも弁護士という職業意識を強くもっているせい……。

ドミノ・ハーヴェイは実在の美女！

「賞金稼ぎ」を主人公とした映画はスティーブ・マックイーン主演の『ハンター』(80年)などたくさんあるらしいが、この映画最大の特徴は、その主人公ドミノ・ハーヴェイ(キーラ・ナイトレイ)が実在の人物だということ。しかもそれをより興味深くしているのが、イギリス人俳優の故ローレンス・ハーヴェイとスーパーモデルのポーリーン・ストーンのもとに生まれたドミノ・ハーヴェイは、母親譲りの美貌によって若い時モデルとして活躍していたということ。

ところが、そんなセレブな世界に反発を感じていたドミノは、20歳の時「保釈金保証人」の記事を読んで、バウンティ・ハンターになることを決意し、トップモデルとは全く異質の荒くれ男たちがしのぎを削る命がけの世界に飛びこんでいったということだ。

なぜドミノが恵まれたセレブな環境に反発を感じたのかについては、彼女のロンドンにおける少女時代で描かれている。幼くして愛する父を失ったドミノだが、

派手な社交家の母親ソフィー（ジャクリーン・ビセット）は再婚相手を求めて日夜浮わつた生活をくり返していた。

そんな母親に幼い娘が反発を感じたのは当然だが、ドミノの場合、良家の子女であるにもかかわらず、それが徹底した「硬派」の不良少女へと進展していったのが面白い……？ ドミノが取り組んだのは、銃を中心とした武器と武術の訓練、そして何とヌンチャク。ブルース・リーばりのヌンチャクの取扱いはそりゃ見事なもの……。

ドミノの仲間たちは？

バウンティ・ハンターになりたいと思っても、かわいい女の子が1人で入り込んでいくには、あまりにも異質な世界。ところが世の中は「当たってただけろ方式」で成功することが多いもの……。たまたまドミノが大枚をはたいて受けたインチキ講習を主催していたエド（ミッキー・ローク）やチョコ（エドガー・ラミス）に食らいついていったのが、その後の大変な「縁」となったから人生は面白い……。

この映画でドミノは、エドとチョコの2人とチームを組んで活躍するが、ドミノの教官役となったエドが舌を巻くほどの実力と度胸を発揮したのが、このドミノというわけだ。

さらにパンフレットによれば、ドミノは約50人の逮捕に関与し、そのうち10件は非常に危険な状況であったとのこと。35歳での死亡と相まって、何とも壮絶な「女の一生」に脱帽！

この日、あの本田美奈子が……

私がこの『DOMINO』を観たのは、11月6日の日曜日。映画の中ではわからなかったが、パンフレットを読んで知ったのは、主人公のドミノはこの映画完成直前の2005年6月27日、自宅の浴室で遺体となって発見されたという事実。もちろんその死因は謎に包まれたままだ。

つい最近、『スカーレットレター』（04年）が完成し、韓国で2004年に公開された後、2005年2月22日に自殺して世間の注目を集めたのは、韓国の若手美人女優

のイ・ウンジュだが、ドミノの死亡は、その職業が職業だっただけにさまざまな憶測を呼ぶとともに、その死亡によって新たな「ドミノ伝説」を生むことになった……。

そんな日曜日の夜、自宅でテレビをつけた途端に飛び込んできたのは、ミュージカル女優（あえてこういう称号をつけたい）本田美奈子が急性骨髄性白血病のために死亡したというニュース。彼女はつい先日、私の映画評論『シネマルーム8』のコラムで取りあげたばかりの私の大好きなミュージカル女優で、回復のニュースが伝えられていただけにきわめて遺憾！

1985年の夏目雅子に続いて今回本田美奈子の生命を奪った急性骨髄性白血病に対して強い憤りを覚えるが、それも天命……。ドミノと本田美奈子に対して、ここで合掌……。

ドミノ VS タリン

この映画の登場人物は多いが、私の注目はどうしても女優陣に……。まず、ドミノ・ハーヴェイを演じるキーラ・ナイトレイは、『パイレーツ・オブ・カリビアン』（03年）でジョニー・デップらを向こうに回して大活躍し、『キング・アーサー』（04年）ではアーサー王たち円卓の騎士とともに戦う女戦士として大活躍した美女。そのキーラ・ナイトレイが、タバコをプカプカと吸い、荒くれ男たちに混じって汚い言葉を乱発しながら重いマシンガンで乱射する汚れ役に挑戦……。

他方、この映画の基調となる、取調室でドミノの取調べにあたる FBI 女性捜査官がタリン。

このタリンを演じるのが『チャーリーズ・エンジェル』シリーズ（00年、03年）や『キル・ビル』シリーズ（03年、04年）でアクションを中心に活躍している中国系女優のルーシー・リュー。

面白いのは、このルーシー・リューはドミノの取調べ場面のみ限定して登場し、アクションは全くなしにしていること。ずっとイスに座ったままで鉛筆を削ったり、薬をコップに入れたり「小手先だけ」の演技（？）だから、その静の演技は難しいと思うのだが、そんな心理分析の専門家である FBI 捜査官を静かに演じたルーシー・リューにも注目……。

■ ドミノの教官や依頼者たちは……？

この映画はあくまで主演のドミノに焦点をあてたものだが、ストーリー構成のために必要な登場人物は、第1にドミノのバウンティ・ハンターの教官役となるエドや相棒(?)のチョコ。第2に保釈金保証人であり、エドらへの仕事の依頼主となるクレアモント(デルロイ・リンドー)と陸運局に勤務しているヘンな黒人お婆さんのラティーシャ・ロドリゲス(モニーク)。その他にもバウンティ・ハンターたちの仕事ぶりをテレビ放映しようとしている変人プロデューサーのグループや、1000万ドルを強奪されるカジノのオーナー、さらにはマフィアの親分たちが登場する。そして極めつけ(?)は、1000万ドルの隠し場所をその右腕に記されていたため、右腕もろとも切り取られてしまう悲劇の男ロカス。そのうえ犯人と誤認されるマフィアの息子たちのグループも登場する。

しかして、そのそれぞれの役割は……？

■ ストーリーは複雑すぎてサッパリ……？

この『DOMINO』は、新聞の宣伝やチラシを見ていると結構面白そうなので、人気は上々だろうと予想していたが、日曜日の夕方6時30分からの上映にもかかわらず、観客はわずか10数名のみ。事前にパンフレットを買って少し読んでいた私はある程度ストーリーを理解できたが、それでもたくさんの登場人物それぞれの役割や、誰が誰を助けているのか、裏切っているのか、そして1000万ドルはどこにあるのか、さらに何が真相で何がインチキかetc. ストーリーの正確な理解はきわめて難しいもの……？

したがって、パンフレットも購入しないでアベックで来ていたあまり行儀のよくない2組の男女などは、しゃべくりながら、またジュースを飲みながら観ていたようだが、何の映画かサッパリわからなかったのでは……？ もっとも2人だけの時間を過ごすことができれば、彼らには映画の内容やその良し悪しなどはどうでもいいことなのかも……。

2005(平成17)年11月7日記